共生のキャンパスを目指した学生の取り組み

地域連携 児童館「うずらの里」との交流

2023年10月15日(日)、「共生のキャンパスづくりプロジェクト学生実行委員会」における地域活動の一環で、「うずらの里児童館」と協力し藤森神社にて開催されました「深草ふれあいプラザ」の伝承遊びコーナーに出店しました。
「深草ふれあいプラザ」は、幅広い世代の住民が相互に交流を深めるとともに深草の良さを実感し、地域への愛着を更に深めることを目的に例年開催されています。コロナ禍の影響により、4年ぶりの開催ということもあり、イベント当日は地元の人気店が集結するグルメコーナーや、京都教育大学吹奏楽部の皆さんによる演奏、近隣小学校・幼稚園のお子さんの可愛らしいステージなど楽しいプログラムが盛りだくさん披露され、多くの来場者で大盛況となりました。

参加した学生の感想

◆地域の皆さんや子ども達と遊びを通じてお話をすることが楽しかったです。ペンシルバルーンを担当しましたが、バルーンを作って渡すと、みんな笑顔で嬉しそうにお礼を言ってくれるのが本当に嬉しかったです。小さい子と一緒に何かをする経験もなかなかないので、良い経験となりました！

◆地域の取組みに参画することができとても有意義な一日でした。単発で終わらせることなく、大学生としてできることとして「遊び」や「学習支援」などを通じて引き続きうずらの里児童館と交流を続けていければと思います。

新入生あつまれ! 先輩に聞こう!

2023年4月20日(木)・27日(木)の昼休み、「共生のキャンパスづくりプロジェクト学生実行委員会」の活動の一環で、「こんな悩みを抱える新入生あつまれ！先輩に聞こう！」を開催しました。当日新入生からは、「スケジュール管理が大変だけど、どうすればいい？」、「友達ができるか不安」、「サークルは絶対入らないといけないかな？」など、大学に入学後、困ったり悩んだりしていたものの、ちょっと聞きにくい話について質問がありました。先輩からは、スマホや手帳を用いたスケジュール管理の工夫や、サークルの体験談などの話があり、ざっくばらんに交流しました。特に「大学はひとりで食事している人、ひとりで歩いている人がたくさんいるから、『ぼっち』は気にしなくていい。その点は高校より楽です」というアドバイスに参加した新入生はほっとした様子でした。

テイカー講習会

瀬田キャンパスでは毎週水曜日に「テイカー講習会」を行っています。内容は連携入力の練習、ノートの取り方や困りごと相談会等を先輩テイカーが企画し楽しみながら活動しています。現在、瀬田のテイカーは49人登録しておりスキルアップしたテイカーが授業で活躍しています。

テイカーとは…
聴覚障がいや情報処理障がいのある学生にパソコン等で音声情報を文字情報に変換して伝えることをテイクと言い、テイクをする人をテイカーと呼ぶ。

▲テイカー講習会の様子

大宮読書会

コロナ以前には、定着していた大宮読書会が復活しました。
殆どが、以前の賑やかさを知らないメンバーですが、今も利用学生のみならず、本好きがお勧めの本を片手に集まります。敢えて曜日を固定せず、お昼休みから3講時もつかってたっぷりと。途中からの参加も途中退席ももちろんOK。お昼休みに参加して3講時には授業に走っていくメンバーもいます。本の紹介から、あちこちに脱線しつつ会話も弾みます。皆さんも、ぜひフラッとご参加下さい。

▲読書会の1シーン

▲この日紹介された本たち

高大連携 京都市立京都奏和高等学校の生徒との交流

2023年3月17日(金)、高大連携における取り組みの一環として、京都市立京都奏和高等学校の生徒と龍谷大学の学生における交流会を開催しました。学生の体験談では不登校の経験や大学受験など進路選択にて不安だったことや苦労したことを、どのように克服したのかについて体験を交えて報告がありました。参加者からは「学生の経験談を聞いて、進路選択について具体的に考えられるようになりました」「とても勇気づけられた」などの感想が聞かれ、活発な意見交換を経て盛況の内に終了することができました。

▲障がい学生支援室の見学

▲学生の体験談を聞く生徒と保護者

Topics

ユニバーサルデザインセミナー「フォントが変われば、授業、大学が変わる!」を開催

2023年7月19日(水)、「文字のユニバーサルデザイン」に奮闘し、「UDデジタル教科書体」を開発した書体デザイナーの高田裕美氏を講師に迎え、「ユニバーサルデザインセミナー」を開催しました。高田氏からは、ロービジョン(弱視)や学習障害のひとつであるディスレクシア(読み書き障がい)の人が読みやすい「UDフォント」の開発背景や効果的な活用方法などについてお話頂きました。書体を変更するだけで、文字が読みやすくなる人々の存在を知り、授業の資料、大学の文書作成において「UDフォント」の活用を広げていきたいと思います。

障がい学生支援室が見事「龍谷ICT教育学長賞」を受賞!

音声認識アプリ(UDトーク)を活用した授業の情報保障の取組みが、見事「龍谷ICT教育学長賞」を受賞しました。龍谷ICT教育賞は、ICTを活用して授業運営に尽力している教員や、学生の学修意欲向上に努めている教職員を対象として、優れた取組を称賛するために、2020年度に創設された制度です。障がい学生支援室では、引き続き、誰もが授業や大学生活にアクセスしやすい環境づくりに努めていきたいと思います。

編集後記 今回のVariproD.は、例年以上に、学生たちのパワー溢れるものとなりました。本誌で紹介した学生の、さまざまな取り組みは、すべて学生たちが「ともに学びあい、育ちあう場」となっています。わたしたちは、これからも変わらず、学生たちが育ちあう姿をそっと見守り、応援していきます。

VariproD. at ryukoku University
(ヴァリプロード)2023年12月発行　発行：龍谷大学障がい学生支援室
〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67　電話 075-645-5685　http://www.ryukoku.ac.jp/support/

VariproD. at ryukoku University

ヴァリプロード　Vol.4
〈学生発　共生のキャンパスづくりを考える情報誌〉

本誌『VariproD.(ヴァリプロード)』は、ラテン語で「多様性」を意味する“varietas”と「声明する」を意味する“prodere”からなる造語で、大文字部分を繋ぐと「見よ」を意味する“vid.”となる。　デザインは、山﨑幸愛さん(卒業生)。

2022年12月27日、「あ、いいね！笑顔から始まる大学づくり」というテーマで
第５回共生のキャンパスづくりシンポジウムを開催しました。
学生、教職員、学外者合わせて約100名が参加し、盛況のうちに終了しました。
第１部では、４名の学生が登壇し、報告を行い、第２部では、第１部の報告を受け、
アクセシビリティの観点も踏まえながら、誰もが平等に、そして楽しく参加できる
大学環境づくりについて、それぞれの経験や思いを出し合いました。
また、2023年度には、シンポジウムでの報告からさらにアップデートし、
新たな活動も行っています。

繋がりを生み出すために ― コモンズを活用した大学づくり ―

法学部　高 橋 宏 太

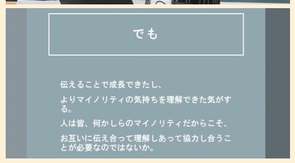
高橋さんは、コロナ禍で浮き彫りとなった「繋がり（コミュニティ）の危機」に着目し、学生が再び繋がりを取り戻すために、コモンズが活用できるのではないかと考えました。そこで、先進的なコモンズ整備が行われている立命館大学にて、ヒアリング調査を行い、本学のコモンズとの比較をしながら報告を行いました。
調査の結果、立命館大学では「学習している学生が見える化されている」「学習形態によって自由なレイアウトができ、人と人とが交わる工夫がなされている」など、学生が求めている「学生本位のコモンズ」が作られていることがわかったそうです。また、本学のコモンズについて、「個人学習設備が充実している一方、可動性や回遊性を有したグループワーク環境が弱い」「現状のコモンズの活用についての周知が足りていない」ことなどを指摘しました。
最後に、「人と人が出会う場があっても、ハブとなるものがなければ、持続可能とはいえない。ちょっと話そうよ、と言える空間が必要であり、大学内にそういった空間をつくることが非常に重要である。」とまとめました。

提言（今後の課題と可能性）

- ➤コモンズは学習スペースだけを指しているのではない 料理スペース・国際交流ブース・くつろげる場所
- ➤先ずは個人を孤立化させないことが重要
- ➤大学が学生にとってのセーフティーネットになる

伝えるのって難しい、でも伝えなければ理解し合えることもない

文学部　中川美桜子



中川さんは、「伝えるのって難しい、でも伝えなければ理解し合えることもない」というテーマで、自身の経験も交えながら、報告をしました。
中川さんは、高校時代、自分の病気について周りに知らせずに学校生活を送っていましたが、大学では周りにオープンにしようと決意し、龍谷大学に入学しました。
実際にオープンにしてみて、困っているときに自然に助けを求めることができる、等のメリットがある一方、伝えるときに緊張する、伝えたことで自分ができることの限界を他人に決められてしまう、等のデメリットも感じたそうです。ただ、「それでもやっぱり伝えることは大切だと考えている。伝えなければ歩み寄る機会すらなくなる。自らのマイノリティな部分を説明し合い、理解し合うことがなければ、誰もが過ごしやすい環境は作れない。」と、思いを伝えました。

コロナ禍の留学生の生活課題と解決策―日本人学生との比較を通して―

経済学部　神 原 雄 大

政策提案
- 1 留学生と日本人学生の交流促進
- 2 留学生が相談できる環境づくり
- 3 留学生への経済支援
- 4宗教に配慮した食事の表示・提供

神原さんは、日本における留学生受入れの現状と問題点を取り上げ、留学生調査班で行った調査と分析の結果の報告と、その結果を踏まえた政策提案を行いました。
神原さんが調査を行うきっかけとなったのは、経済学部ピアサポーターの業務中、留学生が日本人学生の輪の中に入れないという現状を目の当たりにしたことです。調査・分析の結果、留学生は日本人学生と比べて経済状況が悪く、困ったときに頼れる人が少なく、それらの要因が留学生の生活満足度の低さにつながっているということがわかりました。そういった結果を踏まえ、４つの政策提案を行いました。（左参照）
2023年度には、この政策提案のうち、「宗教に配慮した食事の表示・提供」の実現に向けて、以下のような活動を行っています。

多様な学生がつながり遊べるプロジェクト、フォトプロ

経営学部　渡 邉　仁

渡邉さんは、自らが企画・実施を行ったプロジェクトである、第１回写真でつながるプロジェクト（通称：フォトプロ）について、参加者アンケート等を踏まえて報告しました。
渡邉さんは、「自分が参加者ならどんなことが楽しいだろう」と考えながら企画を行い、アイスブレイクの時間を長くとる、班単位で動くようにする、２日間連続の開催にする等、様々な“楽しくつながる”ための工夫をしました。その結果、参加者アンケートでも、大多数の学生が「参加してよかった」と回答し、本プロジェクトは大成功となりました。
また、これからも新たなプロジェクトを企画したい、共生のキャンパスづくり実行委員会の規模を大きくしたい等、今後の展望についても報告しました。

フォトプロについて
- ●趣味を通して人との交流の機会を作る
- ●簡単な技術についての講義もすることで初心者も参加し易い
- ●参加者同士の会話の機会を多く設ける
- ●私が写真サークルを設立したかったので開催した

異文化理解ワークショップ「ハラールフード」について学ぼう！

2023年５月26日、共生のキャンパスづくりプロジェクト学生実行委員会の「留学生活調査班（ハラルフード推進プロジェクト）」メンバーで、異文化理解ワークショップ「ハラールフード」について学ぼう！を開催しました。
まず、プロジェクトリーダーの神原雄大さんより開催趣旨について説明があり、メンバーの一員でもある留学生のアズラン・サキファさんに「ハラールフード」についてご講演頂きました。講演後はグループに分かれて意見交換を行いました。33名の参加があり大変好評でした。

京大生協のベジ・ハラルコーナー訪問

2023年６月20日、共生のキャンパスづくりプロジェクト学生実行委員会のハラルフード推進プロジェクトメンバーで、既にハラルフードを導入されている京都大学生協のカフェテリア・ルネを訪問しました。
カフェテリア・ルネには、全体の調理場とは別に「ベジ（Vegetarian）・ハラル（Halal）コーナー」が設置され、ハラル認証をうけた食材を用いたケバブプレートなど様々なメニューが提供されていました。メンバーで楽しく試食した後、京大生協の國見様、平野様より、ハラルフード導入の経緯や工夫点などを伺いました。

第２回 フォトプロ

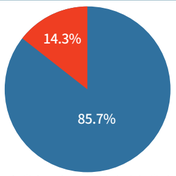
2023年６月17日・18日、第２回フォトプロを実施しました。１日目は実行委員のメンバーがカメラの種類や使い方、撮影の構図等のレクチャーを行い、実際にカメラを使って成就館で撮影も行いました。
２日目は、実際にカメラを持って、参加者全員で藤森神社へ出かけ、いくつかのグループに分かれて撮影会を行いました。それぞれが撮影した写真を見せ合うなど、とても和やかで楽しい雰囲気で、活動することができました。

2022年度　共生のキャンパスづくり実行委員会活動に関するアンケート結果（抜粋）

目 的　本アンケートは、「共生のキャンパスづくり実行委員会」の活動について、そこへ参画した学生の意識や活動の過程で得た学びなどを知り、今後の学生支援の取組みや「インクルーシブ教育」実践に資することを目的とする。

対 象　共生のキャンパスづくり実行委員の学生22名（2021年度、2022年度）、実行委員として参加した教員１名（2022年度）

❶「共生のキャンパスづくり実行委員会」の活動に参加していかがでしたか？

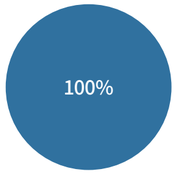


- とても良かった
- 良かった
- 普通
- あまり良くなかった
- 良くなかった

❶の回答の理由

- ●活動の成果のアウトプットができたため。対面の活動が再開し、３年生の間しか他学部の学生と交流する機会はないと考えたため。
- ●自分の意見を大勢に発信することに自ら挑戦するのは初めてで緊張したが、その分達成感があったから。
- ●皆さんと協力してプロジェクトを進めることができてとても良かったと思いました。
- ●自分たちで議論を進めながら活動ができたから。
- ●交友関係が広がったり、自分の視点では気づけなかったことに気づくことができたため
- ●やりがいができた上、学生生活の思い出にもなったから。
- ●今まであまり学校の企画に参加してこなかったため、良い経験ができたから。

❷「共生のキャンパスづくり実行委員会」の取組みの中で、「学び」になったことはありますか？（「自分のためになった」と思うことであればどんなことでもかまいません）



- ある
- ない

❷の回答の理由

- ●実行委員それぞれが抱える悩みや問題意識について知ることができ、教員や職員とともに考える姿から多様性を尊重する龍谷大学らしさが感じられた。
- ●適切な主張はストレスフリーに繋がること。
- ●それぞれに考えや境遇があるため、話さないとわからないことが多くあると学んだ。
- ●他の学部の方と関わる機会がなかったので新たな繋がりが出来たことや、どういったプロジェクトをされているのか知ることが出来たこと。
- ●自分で考えていることを、実際に調査してプレゼンで人に伝えることが、問題提起や説明力にも繋がり、そうしたスキルを身につけることができたと感じている。